

こころは 国文学解教と鑑賞 701/1 (2005-1)

新刊紹介

上野智子著『地名語彙の開く世界』安部 清哉

新しい地名研究が拓く、日本地域文化の宇宙

地名にはことばの宇宙が隠されている。本書は、小地名を群として、また面として捉え、その連環を丹念に描き出すことで、新しい地名研究の可能性を切り拓いた好著である。

私達は普段、公的な地図に記載されない「不記載地名」をただ聞き過してしまっている。しかし例えば、馬のセ、鬼のマナイタ、天狗のコシカケ、小仏のハナ、弁慶のフロバ、烏帽子ザキ……といった、一見不思議な語彙を聞いただけで、面白いことに地名・地形に関する語彙らしい、ということ推定できる。なぜだろうか。何らかの共通するイメージやパターンがあるからであろう。では、どのような全国的共通性や地域性があるのだろうか。

本書は、上記のような地図に記載のない「微細地名」を、「北は北海道の知床半島、南は沖縄県宮古島まで」著者みずから足で丹念に集め、そこに日本人の文化と感性とが投影していることを実例で示した、貴重なフィ

ールド報告とその体系化の試みである。

一例を挙げれば、地名は身近な事物を比喩にとる。地名とレトリックとの関係がそこにある。「牛コロボシ・饅頭島・蠟燭岩・夫婦島・地獄谷」など、動物・食べ物・道具・人間活動による「見立て」の文化である。「三角形の尖った岩礁を烏帽子に響える比喩は日本列島に広く認められる」全国共通地名パターンという。丹念な収集のみが明らかにし得る成果である。烏帽子が現代人の生活から遠ざかっても、「日本人の意識に深く根を下ろした歴史的所産としての価値がたやすくは衰えない」という日本文化の一面が見えてくる。

第二章「数量と地名」「比喩と地名」「伝説と地名」での伝説には義経・弁慶も登場する。第三章「地名と方言」では投影する口語性が検討され、また全国的分布が初めて概観できた岩礁名という小さな地名でさえ地域性が鮮やかに浮び上がる。第四章「地名の周辺」の色彩では基本四色のうち青が劣勢とい

う。時に歴史的文献を溯り、また、漢字表記との関係を探る。「歩けば歩くほど深みにはまってしまうような謎めいた世界」を読み進むと「地名の普遍性と地域性が見え」、読む者を地名学の魅力へと誘う。「地名研究の歩み」「地名研究の枠組み」は「引用文献」と共に最新の情報を提供し、多くの先行地名研究からの引用も、地名学の沃野を目配りよく広く紹介して、入門書としての価値も高い。

著者のフィールドである海岸地名が中心であるが、山地区地名への拡がりも示唆する。例えば、犬さへ後戻りする険しい断崖を指す「天返し」は中国山地にもあり、離れた海と山が「命名視点・命名心理に同一の傾向」を示す興味深い共通性も指摘している。

小中学校の授業で本書を参考に郷土の地名地図作成をしたらきつと楽しく、故郷を見直す機会にもなる。言語・民俗学研究者はもとより、歴史・社会・文化学関係や教育関係者にも広く推薦したい、地名研究史に残る魅力的の一書である。

(二〇〇四年一月五日 A5判 二四八頁)

定価 一九四〇円 和泉書院

(あへ・せいや 学習院大学教授)